

# 素晴らしきミツバチの世界

養蜂とは、ミツバチの素晴らしきとは。永年蜂を愛し続けてきた  
久世佳弘氏が語る、素晴らしきミツバチの世界!!

## 人間とミツバチの歴史

ミツバチと私たち人間との付き合いはかなり古くからあるようです。

スペイン東部にあるラ・アラニーヤ洞窟の壁画には、すでにハチミツを採取する人の姿が描かれています。この壁画は紀元前6000年ごろのものとして残っています。また、エジプトのルクソール付近の王様の墓の壁画にも蜜集めから保存までの様子が描かれています。これは紀元前1450年ごろのものといわれています。これらの異なった地域でハチミツに関しての壁画があったということから、私たちとミツバチの付き合いはもう8000年以上にもなると思われます。ギリシャ神話では養蜂の神様も登場するほどですから、昔から私たち人間とは深い関係があったのです。

はじめは火で巣からミツバチを遠ざけ、蜜を採取していたようですが、ミツバチが木の洞などに巣を作る性質があることから、そのうちエジプトやギリシャで水ガメなどの陶器の入れ物

に巣を作らせ蜜を採るといった、現在の養蜂のもととなる方法が用いられ始めたようです。近代になるまでは木をくりぬいて作った巣箱や、ワラを編んで作った巣箱が使われていました。その巣ごと潰して蜜を採っていたというのですから、昔の人は豪快ですね。

19世紀に入って、ミツバチがある一定の間隔で巣板を作っている事がわかりました。この間隔はビースペース(ミツバチ空間)といって巣の温度を一定に保つなどの意味があるようです。また、六角形の元になる形を与えてやることで規則正しい巣をいつも作れるようにする工夫も生まれました。これらは近代の養蜂にとっての大発見で、現在も巣礎、巣枠として使われています。

こうして甘いハチミツを私達人間に与えてくれるミツバチは、ウシやブタと同じく家畜として扱われてきました。昆虫で家畜の扱いを受けるほど重要視されたのはミツバチぐらいのものではないでしょうか。

日本では江戸時代あたりから二ホンミツバチ

を飼育していたらしく、様々な文献が残っています。現在養蜂されているものはセイヨウミツバチが大半で、明治時代から伝えられてきたようです。二ホンミツバチはセイヨウミツバチに比べ蜜を集める量が少なく、すぐに逃げ出してしまふことも多いことから、効率的な養蜂をすすめるためにセイヨウミツバチが急速に普及していったということです。



ただ、二ホンミツバチは在来種で、病気にも強く、おとなしいという性質を持っていることから、現在も研究がすすめられています。これほど長い間私達人間と共に生きてきたミツバチ。知れば知るほど愛着が湧いてきますね。



株式会社札幌山本養蜂園社長

久世佳弘

久世佳弘

昭和14年 北海道常呂町生まれ。

昭和47年 山本養蜂園札幌営業所勤務

平成6年 山本養蜂園として独立

札幌山本養蜂園

TEL 011-873-3000

事業内容 ハチミツ関連商品、養蜂器具卸販売

住所 札幌市白石区北郷2条7丁目6の13